

16世紀末イギリスの ruff に関する考察

—1580～90年代を中心に—

神 部 晴 子*

A Study on Ruff in England in the late 16th Century

—Focussing on the 1580s—90s—

Haruko Kanbe

要 旨 16世紀に人々の関心を集めた ruff は、特に1580年代から90年代にかけて、最盛期を迎える。そしてそれは、風刺家にとって格好の非難の的ともなった。Ph. スタッブスは、当時のイギリス人における衣装全般の贅沢について痛烈に批判しているが、中でも、彼の ruff に対する奢侈への非難はまことに興味深く、当時の人々の ruff に対する関心の度合いを推察することが出来る。それによると、ruff はあらゆる人達に用いられ、競ってそれに意を注いでいた様子がわかる。

初期の ruff は、シュミーズと区別しがたいほど小さな襷飾りであったものが、スタッブスの記録が残される1580年代には、首からはみだす大きさに発展した。

なぜ、彼らはそれほど巨大な ruff を着用したのであろうか。スタッブスは著作の中で、ruff を「傲慢な権力」にたとえている。ruff が傲慢な権力にたとえられる理由は何だったのであろうか。当時の社会的背景を辿りながら考察した。その結果、階級差が崩れ始めた社会の中で、身分制を維持しようとする権威の象徴が必要なのであった。

はじめに

第1章 ruff の発生

ruff (ラフ) は16世紀ヨーロッパ男女の衣装において最も注目すべき服飾品のひとつであり、それは、これまでも多くの研究者によって述べられていることから証明出来よう¹⁾。そして、残された数多くのこの期の肖像画にも見ることが出来る。またイギリスでは、文献にも度々登場し、とりわけ当時の風刺家の非難の対象にまでなった。

本稿では、それほどまでに人々を魅了した ruff の最盛期である16世紀末に焦点を当て、ruff に対する人々の関心、ruff の構造について当時の記録をもとに考察した。

“襷飾り”の意のラッフル (ruffle) の転とされているように、ruff は、16世紀初期に見られるシュミーズ (シャツ) の衿元に寄せられる“襷”が発展したものと考えられている²⁾。15世紀を通じて保たれていた深い衿ぐりが、少しずつ小さくなり始め、それが次第に衿ぐりが首に沿って立ちあがるようになる。ブーシェは、1533年ティツィアーノ作の『カルルV世の肖像画』図1を、立ち衿の初例として挙げている³⁾。そして、それにともないシュミーズの端に襷を寄せるようになる。1538年のホルバイン作『ミラン公爵夫人クリスティーナ』図2では、首と手首の部分に小さな襷飾りが見られる。この絵は、初期の ruff の姿であるとして K. M. レスターらも注目している。やがて、この小さな襷

* 本学助手 西洋服装史



図1 『カルルV世』ティツィアーノ, 1533年, プラド美術館蔵(部分)



図2 『ミラン公爵夫人クリスティーナ』ホルバイン, 1538年, ロンドン ナショナル・ギャラリー蔵(部分)

飾りは次第に独立した装飾へと変わる。また、M. v. ベーンは、シャツカラーからネックフリルに変わり始める様を、当時の画家によって残された数多くの肖像画の中に見だしている⁴⁾。

ruffの発祥地については、諸説があるが、一般には、スペインであると考えられている。レ

イヴァー風と言えば、それまでのヨーロッパの流行を支配していたドイツに代わって、誇り高い権威を反映するスペイン風モードが流行し始めたことに起因すると思われる。中でも、前出 K. M. レスターらおよび G. W. リードは、スペイン説を主張する。なぜなら、この装飾りの由来については次のような説があるからである。つまり、首に醜い腫物をもった一人のスペインの貴婦人が、それを隠すためにレースのあふれた装飾りを首の周りにぴったりと付けた。それが後々大流行となったという⁵⁾。しかし、この説はあまりにも寓話的であり、事実ではないとしても、D. ヤーウッド、M. v. ベーンもスペインモードの特徴であると指摘している⁶⁾。

先にも触れたようにスペインでは、1530年代初期、それまで流行していた深い衿ぐりが少しずつ小さくなり、首にぴったりした立ち衿が見られるようになる 図1。そして、ブーシェが述べているように、1539年ハンス・エウォルト作の『ヘンリーVIII世』図3、それと1538年ティツィアーノ作の『フランソワI世』の肖像画図4を見てもわかるように、1530年代末期にはこの立ち衿がイギリス、フランスでも広まっていた⁷⁾。



図3 『ヘンリーVIII世』ハンス・エウォルト, 1539年, チャッツワース・コレクション(部分)



図4 『フランソワI世』ティツィアーノ、1538年、ルーブル美術館蔵

他方、R. L. ピセツキーは、イタリア説を主張する。15世紀末期、イタリアで広く普及していたカミーチャ (camicia) (中世以来の男女の下着、シャツ類の総称。仏語のシュミーズ) には、首周りを襲のある細い布切れで飾るやり方が既に見られ、それは襲衿の出現を物語っている。したがって、しばしば言われるように、襲衿はスペイン起源ではなく、イタリア起源なのである⁸⁾と。そして、後に ruff は、フランスにおいても、「メディチカラー」と呼ばれることから、それがイタリア起源の要因として取り上げている⁹⁾。

ruff の起源については、さらにペーンもまた、イタリアが最初に ruff を制作した国であると述べている¹⁰⁾。カトリーヌ・ド・メディチがイタリア人ヴィンチョーロを伴ってフランスに赴いた時、彼女のために糊付けした ruff を準備する特権を与えた。しかし、一方で、ブーシェは次のような見解を述べている。

「若干の歴史家が指摘したように、16世紀初め以来、インドやセイロンに渡ったヨーロッパ人が、当地で見た“米”の糊で糊付けされたモスリンの大きな衿に驚いたのかもしれない。この衿は、この地方では油を

ぬった長い髪で衣服を汚さないようにするのに役立っていた。この糊付けの流行がオランダにもたらされ、そこからイギリスに渡り、当然スペインにも渡ったのではないだろうか。」¹¹⁾

しかし、当時インドやセイロンでモスリンの大きな衿が使用されていたという事実については、確信が得られていない。

以上のように、これまでの服飾史家の諸説を辿ってみても、ruff の発生については、いずれも決定的とはいえない。とはいってもの幾人かの研究者は、スペイン説を主張する。それは、当時ヨーロッパで社会的に威信を誇っていたスペインが、服装においても相応の影響力を及ぼし、ruff もスペインモードの一環として考えられていることが少なくないという理由が裏付けとなっているものと思われる。事実、レイヴァーも述べているように、当時、勃興しつつあったスペインの国力によるものであることを見逃すことはできない¹²⁾。

第2章 イギリスに伝わった ruff

ruff がイギリスに伝えられたのは、1554年のスペインの王子フィリップ二世とメアリー女王の結婚式の頃とされている¹³⁾。当時の絵画作品を見ると、1537年ホルバイン作の『ヘンリーVIII世』図5には、まだ ruff は見られず、小さな襲飾りが覗いている。そして、1558年のハンス・エウォルトの描いた『フィリップ二世とメアリー女王』図6では、フィリップは衿端に小さな襲飾りが見られ、メアリーは、襲飾り付きの立ち衿を着用している。しかし、1559年の同画家作『フランシス・ブランドンとエイドリアン・ストック』図7では、ruff が見られる。さらに、1560年の『エリザベスI世』図8の肖像画でも、ラフを付けている様子が描かれている。このことから、イギリスには、1554年頃～1560年の間に伝えられたものと考えられる。

イギリスでは、1560年代始め、ローンやキャンブリックが売られるようになった。その頃、



図5 『ヘンリーⅧ』ホルバイン, 1537年, ルガーノ, ティッセン・ボルネミッサ・コレクション蔵



図8 『エリザベスⅠ世』作者未詳, 1560—65年, ハムデン邸 (部分)

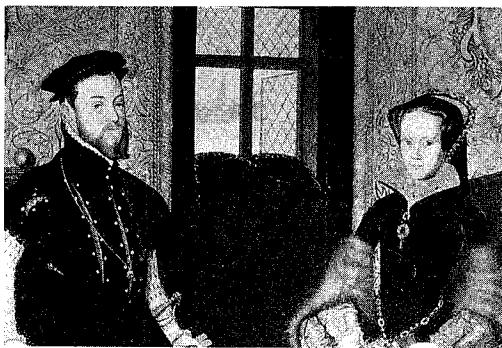


図6 『フィリップⅡ世とメアリー女王』ハンス・エウォルト, 1558年 (部分)



図7 『フランシス・ブランドンとエイドリアン・ストーク』ハンス・エウォルト, 1559年, 個人蔵

エリザベス女王は、上質のオランダ布で作らせていたruffをキャンブリックで新調したが、糊付けの方法を知る者がおらず、1560年にその技術に詳しいオランダ人馭者の妻グィラム・ブーンを彼女の糊付け係として任命している¹⁴⁾。H. ノリスによると、イギリスでは1560年代まで糊付けの習慣はなかったという¹⁵⁾。しかし、実際には1530年代、40年代に若干の糊が輸入されていたようではある。そして、糊製造は、おそらく1560年代に入り、ローンやキャンブリックが売りに出されると同時に導入されたのであろうとされる¹⁶⁾。ちなみに、エドモンド・ハウズは、ストウの『年代記』の編著書の中で、糊は1562年に初めてロンドンにあらわれたと回想している¹⁷⁾。そして、1564年、フランドル出身のマダム・ディヘン・ファン・デア・プラッセが、ロンドンのオランダ人居住区で糊製造業を始めている。イギリスの婦人達は、自分で作ったキャンブリックのruffを彼女のところに持ち込み糊付けをしてもらった。彼女は、このような婦人達に、4~5ポンドの授業料で糊付けを教え、20シリングで糊付け準備の方法を説明した¹⁸⁾。このことは、G. W. リードも著書『衣服に関する談義』(Chats on Costume.) の

中で触れている¹⁹⁾。こうして、イギリスでは糊付けの導入に伴い、糊付けした ruff は急速に広がりを見せたと考えられる。

第3章 ruff の高揚と巨大化およびその要因

ruff はその後、驚くほどの早さで普及した。そして、1580年代から1590年代にかけて ruff は装飾や大きさの上でもその最盛期を迎えた。

幸いにも、当時の様子を伝える貴重な資料が残されている。1583年に出版された Ph. スタップスによる『濫用の解剖』(The Anatomie of Abuses.)²¹⁾である。これは、残された記録のなかでも当時の ruff を知る手がかりとして、これまでも多くの研究者によって引用されている。それは、ruff ばかりではなく、当時の社会生活や風習について、著者 Ph. スタップスと聞き手のスピュブデュースとの対話形式による、全300ページほどで成り立っている。

まず、それらの中から当時の ruff が人々にとってどれほど重要であったかを示す記述を取り上げよう。

「今や、ruff を着けないものはほとんどいない。どんなに貧しく、あるいは他のものはたとえ質素にしても、全ての者が三つや四つの失敗作を持っている。まるで、キャンブリックかオランダ布、ローンのようなお金を出せば手に入る高級生地では十分でなく、それらに絹糸で全面に刺繍をし、更に推測するところによると、金糸、銀糸、その他の多額の高級レースで飾る。いずれにしても、彼らは高級ないしはそうでないものを維持するためのお金を持っていた。なぜなら、彼らはなんとかしてそれを手に入れ、でなければ、スタッターズ・ヒルやスタンゲート・ホールにある領地を売却したり、しまいには抵当に入れたりしている。そして、行き着くところはタイーバーン処刑場で命を失うのである。」²²⁾

このように、ruff はあらゆる人々に着用され

た。しかも彼らはお金に糸目をつけず競ってそれを取り入れ、ruff に対してかなりの贅を尽くしていた様子をうかがうことができる。そして、そのことは女性の間でも同様であった。風刺家 Ph. スタップスはそれも克明に書き残してくれている。

「女性たちは、オランダ布、ローン、キャンブリックといった高級生地で作った大きな ruff やネックチーフを着けている。」²³⁾以上のように、ruff は当時男女共に大変に意を注いでいた衣装の一部であった。そして、特に1580年代は風刺の対象となるまでその流行が進んだ。

次に、当時の ruff の特徴として忘れてならないのが、その大きさである。残された絵画を見ても、寸法が最大であったのは1580年代であることがわかる。ヤーウッドも、1580年代から1585年の間に大きさが増し、首のサイド9インチ(約22センチ)に広がり、生地18ヤード(約16メートル)も使用したと述べている²⁴⁾。Ph. スタップスもその様子を次のように記している。

「彼らは巨大で奇怪な ruff を着けだした。深さはなんと1/4ヤード、その上それ以上のものもあり、それ以下のものは少なく、ぴんと立たせると首からたっぷり1/4ヤード(それ以上)あり、効果どころか肩先を飛び出すものもある。そして、ぼろきれのように肩で四方八方に流れ、風の中でバタバタとはためいている。」²⁵⁾

1/4ヤードというと、約23センチである。それほど大きなものが、首のまわりを取り囲んでいるのである。しかも、それを越えるものもあったというのだから、それを着けている本人は、さぞかし身動きにも不便を感じたであろう。レイヴァーは、その様子について、「襷袢は大きくなる一方で、ついに、食卓についても料理をまともに口に運ぶことができないほどだった。」²⁶⁾と述べている。当時、独特の名を持つ大きな ruff があった。その名を車輪型 ruff (cartwheel-ruff) という。これは、この時代の特徴的なスタイルである。この形については、これまでも多くの研究者が触れている。

例えば、Ph. スタッブスはその姿を「絞首刑台3歩手前の幅」と言い²⁷⁾、カニントンは、まるで「円盤上に乗せた頭」のような外観である、と評している²⁸⁾。しかし、この車輪型 ruff は、その大きさのためか、1582年に若い女性間で反感をかっただ。なぜなら、本来の女性的美しさである喉や胸をあまり隠したくないという理由によるものであった。その結果、一部若い独身女性の間では、前の部分を開けて後ろの部分を高くしたウイスク (whisk 小髻) を用いる姿が見られるようになる²⁹⁾。

Ph. スタッブスは、さらに、当時の ruff の構造についても克明に記述している。

「今では傲慢な権力を支え、それを維持する二つの大きな柱を発見した。一つは、スターチ (starch 糊) と呼ばれる液体の一種がある。悪魔がそれを液体に漬けて洗うよう望んだ。ruff が乾くにつれて堅く立ち上がるのである。もう一つの柱は、最高の高さを保つために金糸や銀糸または絹糸を巻き付けたワイヤーで作られた仕掛けがある。それは、サポータス (supportasses 支え)、あるいはアンダープロッパー (underpropper 下支え) と呼ばれている。これは、ruff 全体を支えるために ruff の下やバンドの外側の上の部分に着けるようになっている。」³⁰⁾

このように、大きな ruff は、糊付けやサポータスあるいはアンダープロッパーという支えを使用することによってその外観を保っていた。

糊の導入と同時に ruff はますます大きくなった³¹⁾とヤーウッドが指摘しているように、事実1560年代初期の糊の導入以来、ruff の寸法は巨大化してくる。しかし、ruff が流行し始めてから約20年ほど経過した1585年、エリザベスの寵臣であったパーリー卿ウイリアム・セシルは、糊製造禁止法案に関する演説をしている。

「町で飢えてパンを求めている多くの人々を、飢餓から救うことが出来るであろう穀物を、虚栄と驕慢とを誇示するために糊に

するとは、まことに嘆かわしいことではないか。」³²⁾と。

結局、セシルは1588年、製造独占権を一部の人々に公布する手段をとった³³⁾。しかし、激しい抗議によって1601年にはエリザベスが止むなく撤回した。

このように、糊製造は、当初イギリスではひとつの新産業であったが、ruff の巨大化が進むにつれて奢侈禁令を推進する者にとっては非常に目障りな問題にまで発展した。ジョン・サースクは、次のように述べている。

「糊の使用がやたらと増えたのは、襷袢を着用する人が多くなったためではなく、襷袢のサイズが大きくなり、豪華になったからでもある。二重襷袢が数年前に流行したかと思うと、今度は全くとてつもないほどの幅広の襷袢が流行した。そして、おそらく襷袢が大きくなれば、それだけ余計に首をこすり、汚れるのも早く、糊付けする回数も多くなり、糊の使用量も増えた。」³⁴⁾

彼によると、糊付けの急増は ruff の使用者の増加ではなく、その寸法の変化であると主張している。Ph. スタッブスが、それを‘悪魔の液体’と称し非難しているように³⁵⁾、ruff の巨大化と糊付けが大きく関わっていたということは間違いないであろう。そして、その糊付けと ruff との密接な結びつきについては、川北稔も指摘している³⁶⁾。

次に、ruff の巨大化を支えたもう一つの仕掛けが、スタッブスの著作の中でも触れている糊付けの過程で用いられた道具、‘型付け棒’ (setting-stick, pocking-stick) である。以下は、H. ノリスの『服装と流行』(Costume and Fashion.) に負うところが多い。これらは初め、木や骨で作られていたが、1773頃には鋼鉄製になる。まず、鉄やスチールで出来たスタンドを火で暖め、そこに型をつける棒を差し込む。そして、その棒が十分暖まった時、既に糊付けして湿った ruff に縦と横に 8 の字型に襷を畳み、型付けする。完全に堅くなるまでこの動作を繰り返す。このようにして、美しい ruff の



図9 『ruffの製造工程を描いた風刺画』, 1595年頃

襷が作り出される。このことによって、かなり大きな ruff の襷も作り出すことが出来た³⁹⁾。9 図はこれらの道具を使って、ruff を作る様子を描いた風刺画である。左下の火鉢の中にポッキング・スティックが入っている。そして、中央の人物が取り出したそれを ruff に押し込んで型をつけている。また、後ろの壁には出来上がった ruff の形をいかに崩さないように掛けている様子を見ることが出来る。面白いのは、糊付けをしている人物が人間ではなく、Ph. スタップスの言っている‘悪魔’として描かれていることである。

また、この他に巨大な ruff を支えるために用いられたものが、サポータスあるいはアンダープロッパーであることは前述した。Ph. スタップスも幾度となくこれに触れている。また、これらはしばしばリバト (rebato) と呼ばれることもある。これらは針金状の枠で作られ、一般的には金糸や銀糸または絹糸を巻き付けたもので、ピンで留めて糊付した ruff を支える。これによって ruff は後部を立ち上がらせ、前後に傾斜を与えた 図10³⁸⁾。

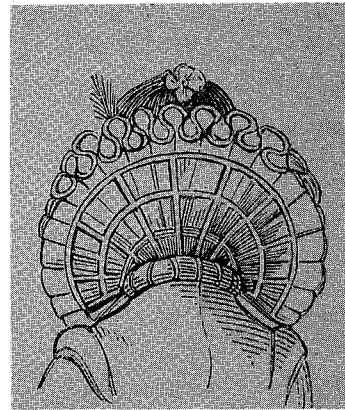


図10 『サポータス』
(プランシェによる)

第4章 1580年代～90年代にみる ruff

1550年代後半、ruff がイギリスに伝わって以来、またたく間に流行した。そのことは、1599年のトマス・デッカーの作品『靴屋の祭日』第4幕第1場の中でも、既製品の ruff が売られ、一般市民にも広がっていった様子を見ることが出来る。あらゆる人が ruff を競って着用して

いたことは、当然風刺家の関心の対象ともなったが、その要因にはそれだけではなく、その大きさにもあった。第1章でも触れたように、初期の ruff は、衿の部分を囲む小さな髪飾りであり、シュミーズとあまり区別立てしづらいほどの大きさであったが、Ph. スタッブスの記録が残された1580年代には、首からはみだすほどの大きさにまで発展していた。それを支えていたのが、糊付け、サポータスといった方法であった。しかも、それらは当時の ruff にとって非常に大きな役割を果たしていた。まず糊付けについては、当時のイギリスにおける糊製造業の発展をもたらした。1560年頃から長期の不況期に入ったイギリス経済の中であって、糊製造は一つの可能性を持つ新産業であった。しかし、失業と貧困といった状況の中で穀物から糊を作り、セシル風に言えば虚栄と驕慢とを誇示するために糊付けをすることは、誠に困った問題でもあった。そして、幾度となく奢侈禁令の中で、ruff についての規制も度々行なわれたが³⁹⁾、にも関わらず、当時の人々は糊付けを行ない、それ以外にもサポータスといった装置を使用し、ruff を支えた。しかし、なぜ彼らはそれほどまでに競って ruff を着用したのであろうか。Ph. スタッブスは、著作の中で、興味深いことを述べている。

「今では、傲慢な権力を支え、それを維持する二つの大きな柱を発見した。その一つは、スターチと呼ばれる液体の一種である。もう一つの柱は、サポータスあるいはアンダープロパーと呼ばれるものである。」⁴⁰⁾と。

彼によれば、糊付けやサポータスが傲慢な権力の支えとなっている、と。

なぜ、そのように論じたのであろうか。そして、彼の言う傲慢な権力とは一体なんなのであろうか。衣服における傲慢、言い換えると、身分を越えた衣服ということである。つまり、ruff は着用者が分相応に越える為の一つの手段であったと考えられるからである。

当時のイギリス社会では、ジェントリ階級

が、大いに勢力を伸ばした時代である。一説には、貴族の地位を掘り崩していったとまで言われる。つまり「ジェントリの勃興」である。1540年から1640年のほぼ一世紀の間に、資本家的活動をしたジェントリが、貴族に比べて相対的に勃興した。そして、川北は、ジェントリの勃興の原因は、全国的に人口が激しく増加し、国内の交易が盛んになったことにあることを指摘している⁴¹⁾。確かに、この時代は、ヨーロッパ中で人口が急増し、中でもイギリスは激しい増加のあった国と考えられている⁴²⁾。同時に、首都ロンドンが、驚異的な発達を見せたのもこの時代である⁴³⁾。つまり、ジェントリの勃興という社会的変動によって、貴族とのそれまでの階級差が崩れ始めたと考えられる。川北も

「勃興したジェントリが、最新の流行を追い、貴族とそっくりというより、貴族以上の生活をさえしようとする有様は、古くからの家系を誇る貴族の目には、不快きわまりないものであっただろう。今や、服装はたえまなく変化し、全ての人々がその華美と新奇さで隣人をだしぬこうと必死である、とは同時代人の論評である。」⁴⁴⁾

と述べている。しかも、贅沢になったのは、ジェントリだけではなく、あらゆる階層にまで及んだ。Ph. スタッブスも、「今や衣服の贅沢が蔓延しているので、誰が貴族や聖職者やら、誰がジェントルマンで誰がそうでないのか、さっぱり見分けがつかない。」⁴⁵⁾と言っている。同じような見解が、当時の文献にも数多く残されている⁴⁶⁾。

このように、階層間の格差がなくなり始めた状況の中で、人々は最も目につきやすい衣服によって、崩壊し始めた階級差を誇示しようとする。従って、彼らが競って贅沢をするのは、当然のことであろう。レイヴァーも、髪衿は、服飾の階級的要素を示すよい例であると言っている⁴⁷⁾。

16世紀と17世紀のイギリス人が自分たちの社会を描こうとする時、彼らはまず区別を設け、

分類し、ランクづけることから始めた、と年代記作家ウィリアム・ハリスンは、1577年にこう記している⁴⁸⁾。ジェントリの勃興と貴族の没落といった大きな社会的変動の中で、彼らは何とか階級差を維持しようと努めた。当然、衣服は、それが目に見えるかたちで現われる。それだけに、流行に追随し、贅沢をした。しかし、一方では、それを抑えようとする奢侈禁令が、ヨーロッパ全域で頻発するようになる。特に、1580年の布告によると、「大きすぎる、度のすぎた髪衿」を禁止する内容が書かれている⁴⁹⁾。奢侈禁令が、髪衿に神経質になり、しまいには幅の規制まで行なうようになったのは、ruff が舶来のファッションであり、まさしく贅沢の象徴であった⁵⁰⁾、とも考えられる。つまり、このことは、ruff がステイタス・シンボルになっていたということの裏返しである。川北は次のように述べている。

「法的な身分が人々の生活を規定しているような状況は、既に15,16世紀のイギリスで崩れ始めていた。贅沢禁止法やスタップスのエイルグナ批判（エイルグナ Ailgna とはアングリヤ Anglia、つまりイギリスのことを指している。）は、この傾向に対する危機感の現われであった。しかし、現実には、身分ではなくて富の力が流行とないまぜになった贅沢などを媒介項として、人々のステイタスを決定する傾向が、どんどん進行してゆくのである。流行を追って贅沢をする者、そうする経済的能力のある者こそが尊敬されるべきジェントルマンたりうる、とすれば、人々がこぞって流行を追い、贅沢に走るのは当然のことであった。」⁵¹⁾

また、カニントンもエリザベス時代の ruff は、社会的優越の印である最も単純な例である⁵²⁾と述べる。

このようなことから、Ph. スタップスの ruff に対する論点を形成していると思われる「傲慢な権力」とは、身分の確定が困難に成り始めた時代における、権威の象徴以外の何ものでもな

いということが出来よう。

結 論

16世紀に渡って人々の関心を集めた ruff は、特に1580年から90年代にかけて、最盛期といっても過言ではないほど隆盛を極めていた。なぜなら、一種の工芸品とも思えるほどの外観を持ち、そのことは風刺家にとっても格好の非難の対象となった。別けても Ph. スタップスは当時のイギリス人における衣装全般の贅沢について痛烈に非難している。彼は、衣服のみならず、犯罪、ダンス、芝居といった社会現象についても触れており、ruff に関しての記述は決して多いとは言えないが、彼の ruff に対する奢侈への非難はまことに興味深いものがある。

ruff はあらゆる人々によって競って着用された。しかし、そのような見事な ruff を用いていた有様を、Ph. スタップスは攻撃し、皮肉にも ruff を単なる“ぼろきれ”と表現している。また、当時の ruff における最大の特徴でもある巨大な寸法は、彼らの関心をより一層魅惑したと思われる。ruff は、糊付け、サポータスあるいはアンダープロッパーによって、その大きさを維持していたが、着用者はその寸法よりも、そこに隠された意味こそが重要なのであった。それは、ruff が着用者の身分を越えるための一つの手段であったことである。ジェントリ階級が勃興した当時のイギリス社会には、人口の急増や交易の発達がみられ、それまでの階級差が崩壊し始めた。そこで人々は、格差を維持するために競って贅沢をした。その点、ruff は最も目につきやすい部分であり、舶来品であったことから、まさにステイタスの象徴となり得た。そして、Ph. スタップスの批判の焦点になっていたのもそのことであった。

衣装芸術における興味深い特徴は、首の部分の整え方である⁵³⁾とカニントンは述べている。彼によると、首を隠す色々な方法は、社会的階級を強調するのは勿論のこと、それ以外にも首と頭のごこちない隔たりの美的価値を満たすこ

とにある⁵⁴⁾、という。そして特に、糊付けが導入されてからは、衣装との美しい調和を生み出したと言われている⁵⁵⁾。

また、第4章の中では触れることが出来なかったが、考察を進めていく過程で、偶然次のような言葉に出会った。

「近寄らないで。あなたの息で私の ruff が壊れてしまう。」⁵⁶⁾ ruff の形が崩れることは、着用者にとって大変疎ましいことであったと思われる。つまり、それほどまでに気を使わなければならないということは、その人が肉体労働者よりも上流であるという事実を意味すると言えよう。

今回は、ruff についての導入部分と、『濫用の解剖』の中にみられる ruff の高揚と巨大化についての考察にしたが、今後は、ruff の様々なスタイル、素材について研究を継続して行きたい。

最後に、本稿の執筆に当たり、適切な御指導と御校閲を賜った石山彰名誉教授に深く感謝の意を表する。

註

- 1) Planché, James Robinson. Cyclopaedia of Costume or dictionary of dress, Lond., 1876, p. 434.
- 2) 石山 彰編、『服飾辞典』, ダヴィッド社, 1972年
- 3) Boucher, François. Histoires du Costume, Paris, 1965, p. 229
- 4) Boehn, Max von. Modes and manners, vol II, Lond., 1932, p. 124
- 5) Lester, Katherine Morris & Oerke, Bess Viola. Accessories of Dress, 1940, p. 194
- 6) Yarwood, Doreen. The Encyclopaedia of World Costume, Lond, 1978, p. 343, Boehn, M. v.. *ibid.*, p. 152
- 7) Boucher, F.. *ibid.*, p. 229
- 8) ロジータ・レーヴィ・ピセツキー著, 池田孝江監訳、『モードのイタリヤ史』, 平凡社, 1987年, pp. 354-355
- 9) ピセツキー著, 前掲著, p. 403

- 10) Boehn, M. v.. *ibid.*, p. 153
- 11) Boucher, F.. *ibid.*, p. 242
- 12) Laver, James. A Concise History of Costume, Lond., 1969, p. 88
- 13) Lester, K. M. & Oerke, B. V.. *ibid.*, p. 194
- 14) ジョーン・サースク著, 三好洋子訳, 『消費社会の誕生—近世イギリスの新企業』, 東京大学出版会, 1984年, p. 110
- 15) Norris, Herbert. Costume and Fashion, vol. III, Lond., 1938, p. 504
- 16) ジョーン・サースク著, 前掲著, p. 110
- 17) ジョーン・サースク著, 前掲著, p. 110
- 18) Davenport, Millia. The Book of Costume, N. Y., 1948, p. 443
- 19) Rhead, G. W.. Chats on Costume, Lond., 1926, p. 184
- 20) Boucher, F.. *ibid.*, p. 244
- 21) Stubbes, Philip. The Anatomie of Abuses, Lond., 1836
初版は1583年のロンドンで、その後も幾度となく出版を繰り返し、最近では1972年にニューヨークで復刊されている。本論文では、1836年版を用いた。
- 22) Stubbes, Ph.. *ibid.*, p. 41
- 23) Stubbes, Ph.. *ibid.*, p. 64
- 24) Yarwood, D.. *ibid.*, p. 343
- 25) Stubbes, Ph.. *ibid.*, p. 40
- 26) Laver, J.. *ibid.*, p. 91
- 27) Rhead, G. W.. *ibid.*, p. 188
- 28) Cunnington, C. W & P.. Handbook of English Coutume in the sixteenth century, Lond., 1970, p. 113
- 29) Rhead, G. W.. *ibid.*, p. 188
- 30) Stubbes, Ph.. *ibid.*, p. 40
- 31) Yarwood, D.. *ibid.*, p. 343
- 32) ジョーン・サースク著, 前掲著, p. 114
- 33) ジョーン・サースク著, 前掲著, p. 115
- 34) ジョーン・サースク著, 前掲著, p. 115
- 35) Stubbes, Ph.. *ibid.*, p. 64
- 36) 川北 稔, 『洒落者たちのイギリス史』, 平凡者, 1986年, p. 141
- 37) Norris, H.. *ibid.*, pp. 624-626
- 38) Cunnington, C. W & P.. *ibid.*, p. 113
- 39) 川北 稔, 前掲著, pp. 67-68
- 40) Stubbes, Ph.. *ibid.*, p. 40

- 41) 川北 稔, 前掲著, p. 74
- 42) 川北 稔, 前掲著, p. 110
- 43) 川北 稔, 前掲著, p. 74
- 44) 川北 稔, 前掲著, p. 64
- 45) 川北 稔, 前掲著, pp. 64-65
- 46) 川北 稔, 前掲著, p. 78
- 47) Laver, J., *ibid.*, p. 91
- 48) キース・ライトソン著, 中野 忠訳, 『イギリス社会史』, (株)リポレポート, 1991年, p. 19
- 49) 川北 稔, 前掲著, p. 68
- 50) 川北 稔, 前掲著, p. 141
- 51) 川北 稔, 前掲著, p. 156
- 52) Cunnington, C. W., *The Art of English Costume*, Lond., 1948, p. 76
- 53) Cunnington, C. W., *ibid.*, p. 76
- 54) Cunnington, C. W., *ibid.*, p. 76
- 55) Rhead, G. W., *ibid.*, p. 186
- 56) Palliser, Bury. *A History of Lace*, Lond., 1971, p. 276

図版出典

- 図1 Panofsky, E., *Problems in TITIAN mostly iconographic* N. Y., 1966, plate 6
- 図2 Rowlands, J., *HOLBEIN*, Oxford, 1985, plate 26
- 図3 Laver, J., *Costume of Western World, Early Tudor*, Lond., 1951, plate 33
- 図4 吉川逸治・摩寿意義郎監修, 世界美術全集8 『ティツィアーノ』, 集英社, 1978年, plate 29
- 図5 Rowlands, J., *ibid.*, plate 25
- 図6 Laver, J., *ibid.*, Elizabethan and Jacobean, Lond., 1951, plate 1
- 図7 Laver, J., *ibid.*, Elizabethan and Jacobean., plate 2
- 図8 Laver, J., *ibid.*, Elizabethan and Jacobean., plate 5
- 図9 Boucher, F., *ibid.*, 図472
- 図10 Planché, J. R., *A Cyclopaedia of Costume*, Lond., 1876, p. 434